

「三島中学校の八朔太鼓踊り伝承活動の取組」

1 学校名

三島村立三島中学校

2 学年・人数

中学生男子（計3人）

3 日時・場所

（1）練習の日時・場所

平成26年8月19日（火）～24日（日）

硫黄島開発センター広場

（2）発表の日時・場所

平成26年8月25日（月）26日（火）・・・旧暦8月1日2日

熊野神社前

4 伝承・活用に取り組んでいる郷土芸能，伝統行事について

（1）名称

八朔太鼓踊り（はっさくたいこおどり）

（2）由来

慶長3年（1598）豊臣秀吉が朝鮮出兵の時，島津義弘公に従い硫黄島から長吉延，岩切，芥切の3人が従軍し，泗川の戦いで窮地に落ち込んだ義弘公を助けて戦功をたてた。これにより恩賞を賜り大いに面目を施し，その凱旋祝としてこの踊りを硫黄大権現宮に奉納したことが由来である。八朔太鼓踊りは旧暦8月1日2日に行われる。両日にかけて熊野神社に奉納した後，集落の各所を踊ってまわる。

（3）構成等

色とりどりの三角布片が何枚もつけられ矢旗を背負い，太鼓を胸につけ，赤い鉢巻をした踊り手十人と花笠をつけた一人の鐘打ちが一緒になって踊る。踊りはミッチ，マンボウタタキ，ナエコミ，カタッポタタキ，ウッコンセンガシラの5つの型から成る。踊りの最後は海岸に出て，「タタキダシ」を行い，島中の悪霊を追い出す。硫黄島八朔太鼓踊りは，県の無形民俗文化財に指定されている。

5 保存会や地域との連携の具体

八朔太鼓踊りは，硫黄島地区会を中心とした取組になっている。また，硫黄島の人々にとって厄を払うと同時にゆく夏を惜しみ，地域が一つになる大切な行事であるという意識が高い。地域社会の一員として生徒，保護者，教職員はこの行事に愛着を持って参画する。地区会は幅広い人々が所属し，先輩から後輩へと伝承する形式をとっている。生徒が減少する中，次世代の若者に託す地

区会の期待は大きい。

6 文化財伝承・活用の取組の工夫した点

先輩から後輩へと伝承する八朔太鼓踊りでは、中学生はいつか自分も青年団の先輩のように華やかに踊ってみたいという憧れを抱く。また地域のかつての踊り手から生徒へ賞賛や励まし、アドバイスをもらう。本番当日、先輩達は若い踊り手たちにはっぱをかけながら伝統を託すように太鼓や矢旗を締め込む。

しかし生徒数は減少の一途をたどる。ふるさとを離れしおかげ留学で硫黄島に学ぶ生徒も八朔太鼓踊りの担い手である。短い期間で八朔太鼓踊りを覚える必要のあるこれらの生徒に青年団の先輩は全体練習以外にも時間を作って丁寧に教える。その生きざまに生徒たちは憧れるのは当然である。

踊りの途中では大きな面をかぶり蓑をつけたメンドンが登場する。手に持った木の枝で島の人々の体を叩き厄を払う。八朔太鼓踊りの踊り手は中学生以上であるが、メンドンの中には小学生が入ることができる。八朔太鼓踊りを通して島は一つになり、伝統は途絶えることはない。

7 取組の様子（練習状況、発表の場等）



大先輩が太鼓を締める



父さんと踊るうれしさ



八朔太鼓踊り本番



メンドン登場！厄を払う

8 参加児童生徒・保護者・地区会・教職員の感想・意見

参加生徒

- 初めて踊った。去年はメンドンだったけど今年の方が緊張した。思っていた以上に息がしにくかった。神社前にはたくさんの方がいて気合が入った。やり終えた後は気持ちがすっきりした。
- 本番前に矢旗を作り踊り以外にもいろいろなことを島のおじさんに教わった。大輔さんを手本にして練習も本番も踊った。父さんと踊り，父さんにほめられ嬉しかった。
- 最初の練習を終えた時には家に帰ってからご飯がのどに通らないくらい疲れた。三日ほど練習をすると慣れてきて自信がついた。メンドンに入って思い切り暴れ楽しかった。

保護者

- 子供の成長を改めて感じた。
- 去年よりたくましい踊りになっていた。
- 来年は後輩にしっかり教えてほしい。

地区会

- 踊り手，メンドン，サポート役にジャンベ留学生や中学生，先生方が頑張ってくれた。
- 伝統芸能継承の火が消えないように，今後も島を挙げて頑張っていきたい。

教職員

- 一つの行事をやり終えるごとに島への愛着が深まるようだ。
- 大きな地域では味わえない地域との密着感がここにはある。
- 地域の方々の子供への指導には本当に頭が下がる。